

女子レスラーが道場破りを
キ○タマ責めで返り討ち！
ついでにフルチン制裁、
そこにさらにおばちゃんが乱入して.....



玉子王子 著

1 章 女相手に道場破りってマジっすか？！

「なるほど、道場破りね」

牧村勇は、三人の男たちをまじまじと見る。

体育館のようなかまぼこ型の建物の中に、二十人ほどの若い女。

建物の入り口に、三人の男と話しに出て来た細身の女が一人。

建物の外には、看板がかけられている。

URP、うさぎ・レスリング・パーティー。

うさぎ県に拠点を置く女子レスリング団体である。

よく言って中堅、廃校になった中学校の体育館を利用して練習場を作っているぐらいなので、資金が潤沢ということはまったくない。

しかしまあ、今エースである勇がそこそ人気もあり、興行も上手くいくようになってきてはいる。が、道場破りが来る理由などない。

そんな有名な団体ではない。

まして、なぜ男が来るのか。

「あんたたちも、レスラーだよね？」

「この体見ればわかるだろう」

ムキイ、と腕に力瘤を作ってみせる男。

ため息が出る勇。

いくら鍛えても、女の自分ではそんな腕にはならない。

——男に生まれただけで力つけるには得だったのに、兄貴と来たら……

子供のころから女の子の遊びばかりして、いまや女装して暮らしている兄。

AIの科学者として成果を上げているらしいが、力の信望者である勇からみれば宝の持ち腐れだ。

チラリ、と勇は目を向ける。

男たちのジャージのズボンの前。

男のふくらみに。

——折角キ〇タマぶら下げてるってのに、体鍛えないなんてありえないでしょう。

その意味で、この道場破りたちはまだ理解できる人種だ。

「うちに勝ってどうするの？」

「名を上げるんだよ」

女子レスリング団体に男のレスラーが道場破りに行って勝って、評判が上がるだろうか。

むしろ下がりそうな気がするが、男たちの目は本気だった。

比較的若い。

勇と変わらないぐらいの年齢だ。

——下っ端が暴走……って話でもないか。なんだかわからないわね。

しかし、道場破りならそれはそれで、相応に相手をするしかない。

元体育館に入る。

真ん中にリングが一つ、周りで筋トレや技の掛け合いに励んでいる若い女たちが二十人ほど。

「勇、その人たちは？」

「道場破りだって」

同期に答えると、笑いが広がる。

いまだき道場破り、しかも男が女子レスリングの団体に。

それは意味不明すぎる。

「本当は何？ 合同練習？」

「いいね、合コンみたいで」

練習練習で恋愛の暇などない。

そんな暮らしなので、同じように若く、同じようにプロレスをやっているような者と知り合える機会は嬉しい。

女たちが喜色を浮かべるのに一瞬三人の男も頬が緩むが、すぐに引き締める。

「本気なんだ。相手してくれよ」

女に好意的に値踏みされるような機会はそうはない。

三人もそれはわかっていて、一瞬喜んでしまった。

だが、それを引っ込めて当初の目的を優先する。

そのストイックさに、勇は引っかかる。

——こいつらちょっと喜んでたけど、すぐに引っ込めちゃった。どうも変だわ。上から言われてきてるか……もしくは、皆とくる予定だったけど、手柄立てようと先走ったか。

それなら、「じゃあ合コンの話しますか！」とはいえない道理だ。

彼女の想像はあたっていた。

この三人はあるプロレス団体の下っ端で、仲間十人ほどが今この道場に向かっている。

最寄の駅で待ち合わせの予定だ。

が、この三人は手柄を立てようと予定より早い電車に乗って先に乗り込んだのだった。

「道場破りだ。相手してくれないなら、看板は貰うぞ」

男が言うと、笑いは収まっていく。

皆、レスラーばかりだ。

戦いが始まるとなれば、易々と退く者はいない。

やはり本気か、とため息をつきつつ、勇は仲間を見回す。

彼女は別に社長でもなんでもないが、社長たちが興行の打ち合わせで出ているこの場では一様トップだ。

道場破りへの対応も決めねばならない。

と言っても、戦うしかないが。

「それじゃ、まずは私と……」

「私私！ 先輩、私！」

やたらうるさい赤い髪の女。

「それじゃ、奈菜と」

「一子も出ようよ！」

出よう、というのは勘違いではないだろうか。

道場破りと戦うといっているのであって、試合するという話ではない。

言われて、一子は眉を顰める。



言われて、一子は眉を顰める。

「私は男の人とは……」

「いいじゃん！ こんな機会中々ないよ！
男女混交、ってことは……
もちろんキ○タマありでしょ！？」

ギョ、と顔を強張らせる道場破り三人。
ジャージの股間をこころなしか引く。
「さてよ、それは危ないだろ」
「えー！ 大丈夫だよ！ だって
タマタマつぶれてもナノテクの薬で治るし！」

肉玉が潰れても一日で治るというが、
実際の所寝れば朝に治っているので
十時間というところだろう。

「私は男の人とは……」

「いいじゃん！ こんな機会中々ないよ！ 男女混交、ってことは……もちろんキ○タマありでしょ！？」

ギョ、と顔を強張らせる道場破り三人。

ジャージの股間をこころなしか引く。

「さてよ、それは危ないだろ」

「えー！ 大丈夫だよ！ だってタマタマつぶれてもナノテクの薬で治るし！」

肉玉が潰れても一日で治るというが、実際の所寝れば朝に治っているので十時間というところだろう。

たじろぐ道場破りたちを、フンと鼻を鳴らして見上げる勇。

「まさか、道場破りに来る命知らずがキ○タマ攻撃だけは無し、なんていうつもりかい？ 女の子相手でも、キ○タマ狙われたら負けるって？」

「へっ、いいよ。どうせやられねえからな」

「おい田中……」

「大丈夫だって。喧嘩じゃちゃんとキ○タマ守るだろ？」

「眼突きはなしで、キ○タマありと」

いわゆるミックスファイトなら、それが普通のルールだろう。

「これで、条件は互角だよな」

「男女の筋力差を考えれば、キ○タマありだけじゃハンデが足りないぐらいだよ」

肩をすくめる勇。

だが、別に負けるつもりはない。

元々柔道をやっていた勇である、力だけで全てが決まるとは思わない。

リングは広い。

六人は裸足で、勇たちは競泳水着のようなワンピース、男たちは海パンのような格好。それぞれレスラーとしての正装だ。

三人同時で戦えるぐらいだが、とりあえず奈菜がでる。

肩をいからせ、足の間を狭くとり、手はボクシングのように構えていた。

ムエタイだ。

男のほうは、レスリングっぽい前傾姿勢。

「へへ、お前らぐらい、俺ら三人で十分よ」

「なに、仲間いるの？」

お互いどうでもいいと思いながら、近付くまでに言葉を交わす。

勝ったらどうなる、という話はしていない。

道場破りなのだから、相手がいなくなれば看板を持って帰るという話なのだ。

パン、と乾いた音。

奈菜のハイキックが男の手で払いのけられた。

同時に、突っ込む男。

肩で奈菜の腹にぶつかり、両手で足の裏を抱え込んで押し倒そうとする。

素早いタックルだ。

が、その腹に奈菜の膝が減り込む。

男の頭を首相撲と呼ばれる形で捕まえ、蹴る。

「よしっ」

仲間の女子レスラーが声をあげる。

が。

そのまま奈菜は押し倒される。

「このぐらいの蹴り、どうってことねえ」

起きようとする奈菜を押し、押し掛かろうとする男。



男女でやっているなので絵面がまずいが、格闘技的に普通の形だ。

マウントという自分が上になる体勢になろうとする。

が、失敗。

膝を突いて正座のような形になった男を、寝転がった奈菜が足で挟み込む格好になる。

それはガードポジションと呼ばれる体勢だ。

マウントと違い、下が上を足で抱え込んで攻撃させない。

同性なら、ああガードポジションだな、と思うだけだ。

だが男女で、男が上だとどうしても別のものに見えて仕方がなかった。

眉を顰める勇。

——これ見るからに**正常位**よねえ……素人が見たら絶対ほかに思わないでしょうね。

しかし、ガードポジションである。

パスガード、というこれを崩してマウントに移行する技術がある。

それをやろうとする男。

が、その隙を突いて耳を引っ張る奈菜。

「いだだだだ！」

わめく男を、別に気にせずに体を横にずらし、脇の下に足を突き入れて蹴飛ばすように離れる。

そのまま回転し、自分が上になろうとするが、それは耳を掴む手が滑って果たせない。

転がり、離れる。

「ぐああああっ！ 耳っ！」

飛んで離れながら、引っ張られた耳を押さえる男。

首を捻り、不思議そうな顔の奈菜。

「取れた？」

「取れてないけど！」

「じゃあいいじゃん」

「マジかよ」

「パンツ姿じゃなかったら、襟首掴むんだけどね」

それはそうだろうが、平気で耳を引っ張って技をかける奈菜は結構変わっているだろう。

とにかく、仕切りのおし。

シュ、と爪先蹴りの奈菜。

ムエタイにはない蹴りだが、まったく何の遠慮もてらいもなく、ごく当然のように相手の股間を蹴りにいく。

手で払う男。

と、踏み込み下段回し蹴り。

ビタン、と相当強烈なビンタのような音。

蹴られた太股が一瞬で真っ赤に腫れる。

強烈だ。普通の男ならそれで倒れ、転げまわるかもしれない。

レスラーも顔を歪める。

が、突き進む。再びタックル。

頭で奈菜の胴体を押して、その場で回転。転がり、上を取り合う。

出来た形は……マウント。

倒した奈菜の腹の上に、太股で胴体を挟み込む形で座り込む男。

総合格闘技なら、ここからは殴られるだけだ。

「奈菜っ！」

一子が慌てて動き出す。

と、前に別の男が割って入る。

「おっと、デブちゃんは俺が相手だよ」

モミモミと、団体一巨大な一子のオッパイでも揉むような動きをボクシングのように挙げた両手出見せる男。

心配げな顔だった一子の頬が引きつる。

別に、オッパイ揉んじゃうぞ、というようなジェスチャーに激昂したわけではなかった。

その前の台詞が問題だった。

「何ですって……」

「だから、デブはこっちって……」

体当たり。

巨体からは信じられない瞬発力でぶち当たっていく一子。

その大柄な体型から想像がつくかもしれないが、彼女は女子相撲出身だった。

「こ、このデブ……あっ」

男の太股は鍛え上げられ、剛毛に覆われていた。

その付け根の、赤いリングパンツの前はたつぷりと膨らんでいる。

その膨らみをはっきりと掴まれて男が青ざめる。

「は、はな……」

「前禪（まえみつ）はね」

ギュウウウウウウウ、大きく、柔らかそうな肉のついた女の手。その中に鍛え上げられたレスラーの、鍛えようがない雄玉が二つ握り締められていた。

「おぐうっ！ や、やめ……」

めりめり、と実際にそんな音が鳴ったら男として終わりだと思うが、男は確かにそういう音を聞いた気がしていた。

恐怖からくる幻聴だろう。

それと、痛み。

いや、握られても実際の所さほど痛くはない。

いつグチャ、といって潰れるかわからない恐怖の方が巨大だろう。

「ああああっ！ は、放してっ」

「前禪（まえみつ）はキ〇タマを掴むつもりで握れって言われるのよ。……女子相撲でも。今役に立ったわ」

「うごおおおっ！」

一子を殴る男だが、密着されて、肉玉を握り締められて力が入るわけがない。

ボスボスと肉付きのいい腕や肩に男の拳があたる。

それを無視し、握った男の部分を引っ張り、投げ倒す一子。

ダン、とリングが音を立てる。

全力で股間を守りたいところだろう。

だが、背中から肺を強打され、息が止まった男は両手を開き、足は膝を立て、股間を無防備に仰向けに倒れるだけだった。

その開かれた男の股間に向けて、一子が足を振り上げる。

股を広げられるだけ広げ、両膝に手を置く。

そして、体を傾けるようにして片足を挙げる。

四股を踏む形。

「避けろ！」

戦っていない一人が叫ぶが、遅い。

「どすこい！ と！」

男の命が詰まった膨らみに、一子の裸足の足が叩きつけられる。

ボス、ムニ、ギチ、グジッ、そんな複数の音が鳴った気がした。

全力で押しつぶし、さらに踏み込む強烈な四股。

「おぎゃああああ！」

大股開きで、全体重をかけた踏み付け。

歯を食いしばりながら絶叫する、器用な男。

半ば、白目を剥き、全身を鉄のように強張らせる。

その様を見て、ニコオ、と優しそうに微笑む一子。

「どうです？　もと女子力士の全体重かけた睾丸踏み潰しは」

「キ○タマがあああああああっ！」

股を閉じ、転がりまわる男。

泡を吹いて声も出ないが、動き回れているので玉は潰れていない様だった。

それでも、もう戦う気力はないだろう。

一方で、倒れた奈菜の上半身を鉄槌で叩く男。

一子は予定通り、そちらに駆け寄る。

その背中にブルンと巨乳を押し付ける一子。そうして、脇の下に手を入れる。

「あ、ちょ……」

振り返る男。

と、前。

座っているので、相手が動けばすぐわかる。

奈菜が、笑っていた。

「よくも叩いてくれたねー」

防御を解き、拳を握る奈菜。

振りかぶる。

狙うのは、引き締まって割れた腹筋の下。

男らしいレスラーの剛毛に覆われた太股の付け根。

レスラーパンツの中身。

パンツを膨らませる男の肉塊。

自分の腹すれすれに拳を振る。

大した力はいれられない。

グニ、ムチッ、と妙に柔らかい感触が奈菜の手に伝わる。

「はぐああっ！」

しかし、男の反応はよかった。男だから、当然とも言える。

「あは！　キ○タマ殴るとこんな風にグニャッとするんだね！」

「ひ、卑怯だぞ！　おぐっ！　はふっ！」

「金パーンチ、金パーンチ！　あはは、なすすべなし！」

「うおおお！　は、はな……はぐっ！　キ○タマはやめて！」

「オラオラ！　キ○タマ潰し！」

「っていうか奈菜、そんなパンチじゃ効かないから、掴んで握り潰せば？」

ビク、と震えて、無理に首を捻って後ろを振り返る男。

「ちょ、怖いな……」

ボスボス急所を殴りつつ、引く奈葉。

のたうつ男。

仲間がもう一人いたが、不思議と助けに来ない。

実際の所、別に不思議ではない、そちらは勇と戦っていた。

お互い、柔道スタイル。

「おらっ！」

水着のような服の襟首を掴み、引っ張る。

ブルン、と首の所が伸び、下のプルプルオッパイが顔を出す。

「おお、いいオッパイじゃん」

「へえ、それじゃ……」

グ、と勇も相手の服を掴む。

パンツを。

引っ張り、投げの体勢に入る。

「あ、おい無茶……」

ビリ、と音が鳴る。

バランスを崩す二人。

リングの上に転がるが、二人とも当然のように受け身を取る。

「無茶しやがって！」

跳ね起きる男。

女たちの笑い声が起る。

ダン、と足を突いたとき、衝撃で股間が揺れていた。

ブルンブルン、雄玉が収まる肉袋が。

それを、リングの周りの女たちが指差す。

「見てよ、おチンチ○丸出しよ！」

「キ○タマブルブル揺れてるわ！」

「勇！ キ○タマ蹴って！ 蹴って行って！」

「っていうかチ○ポ小さくない？」

「あ、本当だ！ よくフルチンになれるわね！」

「いい体してるから、余計租チンが目立っちゃうわ！」

「凄い包茎チ○ポ！ 皮まで鍛えてるんじゃないの！？」

短小であるだけでも辛い。

その上包茎だ。

しかしそれ以上に、それを女たちに知られたのが辛い。

その上、容赦なくそれを嘲笑われるなど。

「ち、畜生、ぶっ殺す！」

「あら、そんなチ○ポで出来るの？」

「ち、チ○ポは関係ねえよ！」

「あはははは！ チ○ポ小さいって認めた！ まあ、認めるもクソも小さいんだけどね！」

「うおおお！」

拳を振りかぶり、突進する男。

かわし、足を引っ掛ける勇。

そして背中を横蹴りで蹴飛ばし、突き倒す。

「ぐおおおっ！ くそ！」

膝と両手を突き、立ち上がろうとする。

土下座体勢とも言えるし、バック体勢ともいえるだろう。

太股の間に、肉玉がブルルンと垂れ下がる。

「がら空きだよ……キ○タマっ！」

バツン。

肉玉を蹴った足が出していいとは思えない、サンドバックを思い切り蹴ったようないい音が鳴る。

ゴチュ、と男の体の中で肉の潰れるような音。

女の細い足の甲と腰の肉の間に男の命の玉が挟まれ、押し潰される、圧殺される。

勇の足の甲に、相当弾力のあるミートボールでも蹴り上げたような妙な感触が伝わる。

「か……」

一瞬、声も出ない。

足が引き下げられる。

その瞬間、絶叫。

「おぐぎやああああああああああああっ！」

「あははは！ 嘘でしょ！ そんなに痛い？ あんたらかなり鍛えてるのに、それでもキ○タマはそこまで痛いの？ うそ臭いわねえ」

手を叩いて笑いつつも、かなり半信半疑という様子 of 勇。

顔をマットに突っ伏し、両手で股間を押さえて動けなくなる男。

「ふんぐうううっ」

「あはは、ごめんごめん。男の人の一番弱い所なんだよね、ちょっとやりすぎかな？ でも潰れてないよね、そんなに動いたり呻いたりできるんだから」

横にしゃがみ、背中を撫でる勇。

確かに、女子レスラーの何の手加減もない蹴りを肉玉に食らいながら、男の肉玉は不思議と潰れていない。

ほんの少し力の角度が違えば二個とも破裂していただろうが、幸運な事にただ、死ぬほど痛いだけで助かった。

それは助かっているのだろうか、と思わないでもない。

「ぐうううう」

「やだ、そんなに痛い？ 仕方ないわね、ちょっと見せてみ」

横から裸の尻を押す。

体重で勝る男だが、身動き一つできないので転がされる。

膝で太股を押さえるようにして股を開かせる。

「ほら、手をどけて。タマタマ見えないでしょ？」

手を掴み、引っ張る。

男はほとんど力も入らず、抵抗できない。

無防備に股間があらわになる。

縮れ毛で必要以上に覆われ、引き締まった他の部分からは想像できない肉の突起に、妙なふくらみ。

まじまじと、鍛え上げられた男らしいレスラーの股間を凝視する勇。

「うーん」

プ二、と摘まむ。

男のシンボルを。

「やっぱり、あんたチ○ポ小さいわね。小指みたいじゃん。この前ヤツたファンのプロレスオタクはリレーのバトンぐらい立派なの持ってたわよ」

赤く腫れあがりつつある肉玉に指をやる。

「はぐっ」

「ああ、ごめん。ん……でも、大丈夫。タマタマ二個とも無事よ」

いつまでも見ても仕方ないので立ち上がる。

「おぐっ、ああっ！ まいった、まいったあ！」

「へへ、まだまだ余裕あるじゃないの。ダメダメ。ここにくるってことは、女なら勝てると思ったってことでしょ？」

「お、思っていない……おぐっ！」

「そういう男の子には、思い知らせないとね。一子、男の子に思い知らせるのに一番いい方法はなにかな？」

まだ別の一人を羽交い絞めにしている一子を振り返る勇。

——ふふ、一子は男のこの部分への責めにこだわりがあるからね。いい答えしてくれるはずよ。ビビらせてあげるわ道場破りさん。

答えを待つ。

一子の答えは、そっけなかった。

「そりゃ女の手で去勢することですよ」

「え」

思わず聞き返すが、一子は平然と話し続けていた。

「昔女子相撲部を笑ったヤンキーグループに、皆でそうやって仕返ししたのよ。一人ずつ、五人ぐらいで寄ってたかって抑えこんで

タマタマ握り潰し

玉はナノテクで治るけど、
二度と私たちのこと
笑わなくなったわ」

「……」

「多分、セックスの対象であるはずの女に
キ○タマを潰されるのは、性的魅力とかを全否定される事になるから、
凄い屈辱なんだと思う。うっふっふ、
あいつらの

**タマタマ潰されときの
縮んだチンチ○
今でも思い出すわ」**

「昔女子相撲部を笑ったヤンキーグループに、皆でそうやって仕返ししたのよ。一人ずつ、五人ぐらいで寄ってたかって抑えこんでタマタマ握り潰し。玉はナノテクで治るけど、二度と私たちのこと笑わなくなったわ」

「……」

「多分、セックスの対象であるはずの女にキ○タマを潰されるのは、性的魅力とかを全否定される事になるから、凄い屈辱なんだと思う。うっふっふ、あいつらのタマタマ潰されときの縮んだチンチ○今でも思い出すわ」

実際の所、笑ったと簡単に言うが執拗に性的な嫌がらせをやられたのだ。

その挙句、女子相撲部は我慢の限界に達して決起した。

ただ笑っただけで握り潰しは極端すぎる。

そんな人間がいるわけもない。

まあ、それは当たり前ではある。

が、実際の所やはりしつこく嫌がらせをされたからと言って、そこまでやるかという考えもありうるだろう。いくら肉玉が潰れてもすぐ治る時代だとは言え。

「ゆ、ゆるしてくれっ！」

「あ、いや、大丈夫。私は別に、あんたのキ○タマ潰したりしないから」

慌てて、男の肉玉から手を放す勇。

これは、脅しが効きすぎる。

いくら市販の薬で十時間程度で治るといっても、やはり易々と玉潰しなどやっていいわけがない、脅しだけでも問題だろう。

「そっちももう降参でしょ？」

一子が羽交い絞めにしている男に尋ねる勇。

真っ青で頷く男。

「こ、降参するから、玉潰しは！」

「なーんだ、つまらない。金潰しやりたかったのに」

一子。

小太りでおっとりした感じなので優しく見える。実際優しい娘だ。

だが心の闇は外からは見えないようだった。

一子が羽交い絞めしたままの一人のパンツを引き下ろす奈菜。

プルンと、縮んでもいくらかはゆれる男の肉塊を凝視し、睨を下げる奈菜。

「おほっ、チンチ○小さい！」

「や、やめて……」

「そっちで泡吹いてる人も小さいのかな？」

「な、何する気だ……」

「フルチンにして記念写真だよ。そうすれば私たちの悪口言っちゃおう、なんて考えないでしょ？」

まあ、それが落とし所だろう。

警察にいくのも面倒な話だ。

「よーし、みんなでチ○コ鑑賞だ！ 最小記録は誰かな！」

キャー、などと、恥ずかしがっているかのような悲鳴が周囲から上がる。

その割に**誰一人反対もしない**という、演技丸出しの「恥ずかしがり」だった。

と、その道場の入り口が開けられる。

「道場破りだ！」

その叫びを聞いて、男たちが小さく声を挙げる。

震えて、泣きそうだった三人の男が目を輝かせる。

四股鞆丸踏み潰しやサッカーボール金蹴りを喰らった二人も、運良く玉は潰れておらず、どうにか座れるところまで回復していた。

が、回復しているからこそ、フルチン祭りで辱められるところだった。

そこに、待ったが掛かったのだ、喜ばないわけがない。

「井本社長！ ここっす！」

リングの上から、見えない仲間に叫ぶ。

仲間が、叫び返す。

「田中あ！ お前なんで先に来てんだ！ しかも女に負けてるだろ！ ってか、フルチンかよ！」

「社長、助けてください！ こいつら、キ○タマばかり狙ってきて、しかもフルチンでチ○コ鑑賞だって……」

一瞬呆ける男。体格のいいレスラーの中でも、一際大きな体。

「あいつ巨人兵井本だ……」

女子レスラーの中からささやきがもれる。

体験版終わり

続きは製品版で